

高鍋町文化財調査報告書 第7集

なか お うし まき  
**中尾・牛牧地区遺跡**

農村基盤総合整備パイロット事業尾鈴2期地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1995. 3

宮崎県 児湯郡

高鍋町教育委員会

## 序

高鍋町教育委員会では、平成5年3月から5月まで、及び平成6年10月から平成7年1月にかけて、宮崎県一つ瀬土地改良事務所からの委託により、尾鈴2期地区農村基盤総合整備パイロット事業に伴う、埋蔵文化財発掘調査を実施いたしました。

本報告書は、これらの発掘調査の成果を収録したものです。本書が、学術研究資料としてのみならず、郷土を理解する資料として、さらには、埋蔵文化財への認識と理解に役立つものとなれば幸甚に存じます。

調査にあたりましては、数多くの皆様にご理解とご協力をいただきましたことに、心から感謝の意を表する次第であります。

平成7年3月

高鍋町教育委員会  
教育長 岩永高徳

## 例　　言

1. 本報告書は、農村基盤総合整備事業尾鈴 2 期地区中尾・牛牧工区、中尾 2 工区の実施に伴い、宮崎県一つ瀬土地改良事務所の委託を受けて高鍋町教育委員会が実施した、中尾・牛牧地区に所在する、牛牧原遺跡及び北牛牧第 1 遺跡の発掘調査報告書である。

2. 発掘調査は、平成 5 年 3 月 8 日から平成 5 年 5 月 20 日までと、平成 6 年 10 月 4 日から平成 7 年 1 月 11 日の間で実施した。

### 3. 調査の組織

調査の主体 高鍋町教育委員会

教　育　長　岩　永　高　徳

社会教育課長　江　川　雅　章

同課長補佐　岩　切　昭　一

主　　事　山　本　　格（調査担当）

調査指導 県文化課主査　北　郷　泰　道（牛牧原遺跡）

同　主　査　音　付　和　樹（北牛牧第 1 遺跡）

4. 調査について、県文化課、水友良典、音付和樹、山出洋一郎、長友郁子、東　憲章の各氏、及び川南町社会教育課、島岡　武氏にご教示、ご援助を受けた。

5. 本書の執筆・編集は、山本が行った。

6. 出土品等の資料は、高鍋町教育委員会で保管している。

## 本文目次

I	はじめに	1
1.	調査にいたるまで	1
2.	遺跡の立地と歴史的環境	1
II	調査の記録	3
1.	調査の概要	3
2.	層序について	3
III	旧石器時代	5
1.	北牛牧第1遺跡における遺構と遺物	5
2.	牛牧原遺跡における遺構	8
IV	縄文時代	10
1.	遺構	10
2.	遺物	10
V	弥生時代	11
1.	遺構の分布状況	11
2.	遺構と遺物	12
VI	まとめ	20
付論 高鍋町、北牛牧第1遺跡の火山灰分析報告		1~4

## 挿図目次

第1図	周辺遺跡分布図	2
第2図	遺構分布図	4
第3図	北牛牧第1遺跡調査区位置図	5
第4図	北牛牧第1遺跡調査区I区平面図	6
第5図	旧石器時代石器実測図	7
第6図	牛牧原遺跡遺構分布図1	8
第7図	牛牧原遺跡集石遺構実測図	9
第8図	1号住居跡実測図	10
第9図	牛牧原遺跡遺構分布図2	11

第10図	牛牧原遺跡遺構分布図 3	11
第11図	2号住居跡実測図	12
第12図	3号住居跡実測図	13
第13図	4号住居跡実測図	14
第14図	5号住居跡実測図	15
第15図	縄文時代、弥生時代石器実測図	18
第16図	弥生時代土器実測図	19

## 図 版 目 次

図版 1	1号集石（西から）	5
図版 2	6号住居跡・7号住居跡	16
図版 3	8号住居跡（西から）	17
図版 4	牛牧原遺跡旧石器時代集石遺構	21
図版 5	北牛牧第1遺跡調査状況	22
図版 6	牛牧原遺跡縄文時代、弥生時代住居跡	23
図版 7	旧石器、縄文、弥生時代石器	24
図版 8	弥生時代土器	25

## I はじめに

### 1. 調査にいたるまで

高鍋町の中尾牛牧地区において、宮崎県・ツ瀬土地改良事務所による、尾鈴2期地区農村基盤総合整備バイロット事業の計画があった。この事業予定地内には周知の遺跡「牛牧原遺跡」が所在し、区域の周辺にも、いくつかの埋蔵文化財包蔵地が所在している。この計画について、宮崎県文化課は、平成4年1月に試掘調査を実施し、遺跡の取扱いを協議したが現状での遺跡の保存は困難となり、発掘調査を実施することになった。まず中尾・牛牧工区について事業実施となった。調査は、平成5年3月から同年5月の期間で実施した。

先の、中尾・牛牧地区的の実施後に、同工区に北接する区域を、同事業、中尾2工区として事業の計画が行われた。この事業区域について、県文化課は、平成6年8月に試掘調査を実施し、その結果をもとに、ツ瀬土地改良事務所と遺跡の取扱いを協議したが、現状での遺跡の保存は困難となった。発掘調査は「北牛牧第1遺跡」について実施となり、ツ瀬土地改良事務所から委託を受け、高鍋町教育委員会で、平成6年10月から平成7年1月の期間で行った。

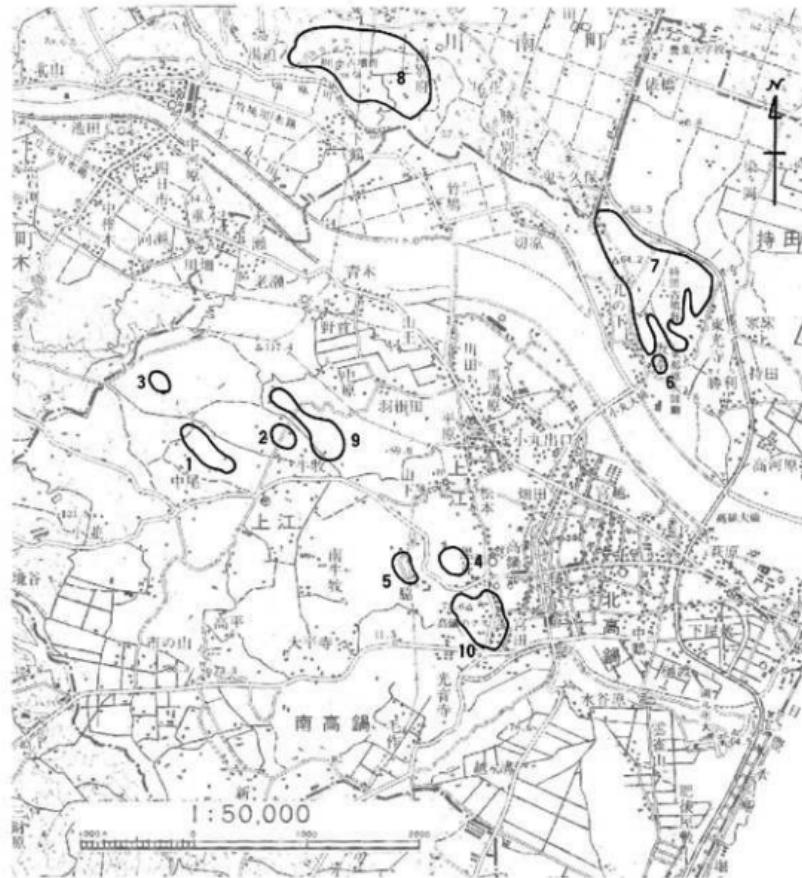
### 2. 遺跡の立地と歴史的環境

調査を実施した遺跡は、中尾・牛牧地区に所在する。高鍋町の地勢は、小丸川の河口部に広がる沖積平野と、これの北、西から南の三方に、比高約60~70mの洪積台地がある。東方は日向灘に向している。中尾・牛牧地区は、西方の台地面にあり、調査した遺跡は、台地北部の縁辺から内部へ約500mの付近にあり、東側からの平坦地と、西側の丘陵にはさまれる開いた谷地形であり、北から南へとゆるやかに傾斜している。

調査地周辺には、縄文時代前期の手向山式土器の採集された耳切遺跡が東方丘陵にある。弥生時代の遺跡として、調査地東方の台地縁辺に、大戸の口第2遺跡があり、発掘調査により住居跡12軒が検出された。これに隣接する大戸の口第3遺跡においても、住居跡が検出されている。さらに、小丸川をはさんだ対岸、北東方向の台地にある持田中尾遺跡があり、住居跡が検出された。古墳時代では、小丸川北岸台地縁辺に、いずれも国指定史跡の、持田古墳群、川南古墳群の大規模な古墳群が出現する。調査地の北側にも前方後円墳2基、円墳7基からなる牛牧古墳がある。江戸時代には、高鍋藩となり、秋月氏が高鍋城に居城した。当地の牛牧の地名として、藩政策によりひらかれた「牧」の1つと考えられている。すなわち、軍馬等の牧場としてひらかれた所ということであり、他にも「牧」の付く地名は、数多くみられる。昭和に入りおこなわれた開拓事業により、今日みられる風景がつくられた。

### 参考文献

『高鍋町遺跡詳細分布調査報告書』 高鍋町教育委員会 平成元年



- |            |            |          |
|------------|------------|----------|
| 1 牛牧原遺跡    | 2 北牛牧第1遺跡  | 3 耳切遺跡   |
| 4 大戸の口第2遺跡 | 5 大戸の口第3遺跡 | 6 持田中尾遺跡 |
| 7 持田古墳群    | 8 川南古墳群    | 9 牛牧古墳   |
| 10 高鍋城跡    |            |          |

第1図 周辺遺跡分布図 (1/50,000)

## II 調査の記録

### 1. 調査の概要

調査は、平成5年3月8日から平成5年5月20日にかけて実施した「牛牧原遺跡」と、平成6年10月4日から平成7年1月11日にかけて実施した「北牛牧第1遺跡」と、2期に分けられる。

先に実施した「牛牧原遺跡」発掘調査は、事前の試掘調査による調査対象区域の設定には、資料が十分でなく、調査期間に余裕がなかったため、重機による、表土のはぎ取り作業に立会し、遺構・遺物の検出した箇所について、調査をする箇所として遺構の精査を行った。そのため、遺構精査を実施した箇所は、調査対象区（工事予定区域）内に散在している。

ここでの調査で検出した遺構は、旧石器時代の集石遺構5基、縄文時代の住居跡1軒、弥生時代の住居跡が7軒である。調査面積は、約3,000m<sup>2</sup>である。

後に実施した「北牛牧第1遺跡」発掘調査は、事前に調査区域を設定して実施した。調査は、区域を3分し、北からI区、II区、III区とした。いづれも、重機により表土をはぎ取った後、遺構・遺物の有無確認のため精査を実施したが、遺構・遺物はみられなかった。次に、I区にて、4m×5mグリッドを設定し、後に20m×25mのグリッドにまとめた。さらにこの大グリッドから南北方向へ幅5m、長さ25mのトレンチを設定し、別に小グリッドも設定した。II区、III区においては、小グリッドを設定し、調査した。

ここで調査において、I区において、旧石器時代の集石遺構を1基、A T層の直下の層にて検出した。また、縄文時代早期～旧石器時代にかけて、石器剥片の集中区を1箇所、検出した。

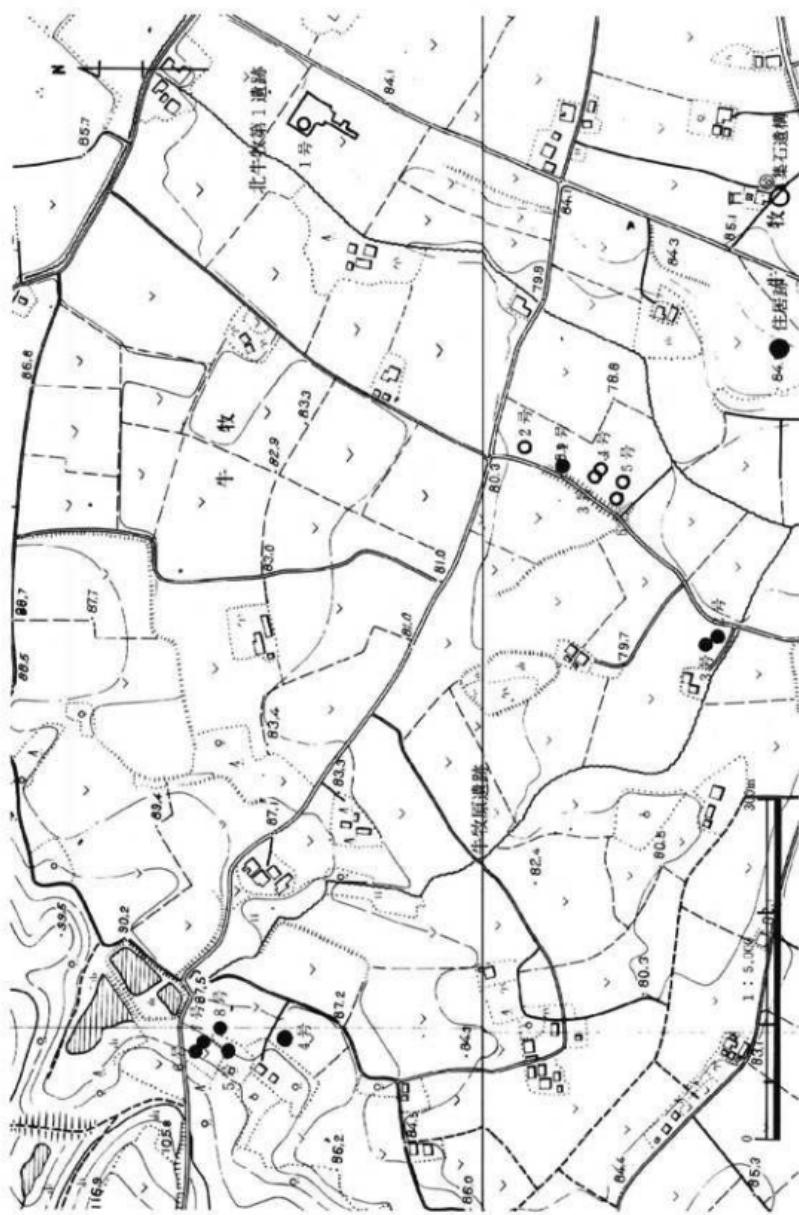
### 2. 層序について

調査区においてみられる基本的な層は、上層から、第Ⅰ層・黒色土（耕作土）、第Ⅱ層・アカホヤ火山灰、第Ⅲ層・黒褐色土（灰色粒混じる）、第Ⅳ層・暗褐色土、第Ⅴ層・黒褐色土（黄橙色粒石混じる）、第Ⅵ層・褐色土、第Ⅶ層・A T火山灰、第Ⅷ層・暗褐色土（灰色粒混じる）である。

この層序については、「北牛牧第1遺跡」において、下層までの調査を実施したため、ここで層序をもとにしているが、「牛牧原遺跡」についても、調査した遺構までの層序に差異はみられないが、開拓やその後の耕作等により、地層の削平がみられる箇所もある。

なお、「北牛牧第1遺跡」においては、火山灰の自然科学分析調査を行った。その結果を付論として卷末に掲載している。

第2図 道標分布図 (1/5,000)



### III 旧石器時代

#### 1. 北牛牧第1遺跡における遺構と遺物

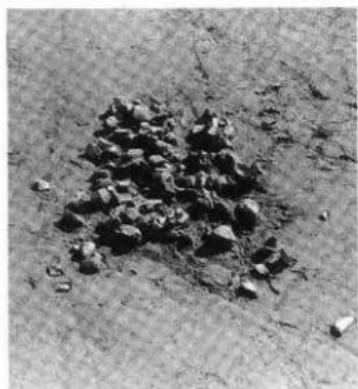
##### 1号集石

「北牛牧第1遺跡」での調査区I区は、北西にゆるく傾斜する谷の斜面に設定したが、このI区の西部（現況での傾斜面の中位～下位）、AT火山灰層の直下の暗褐色土層より検出した。集石は、縦75cm横110cmの規模で、直径7cm大から3cm大の礫を主に用い割れたものが多く、2層に重なりをみせる。底部での敷石はみられず、掘り込みも認められなかった。

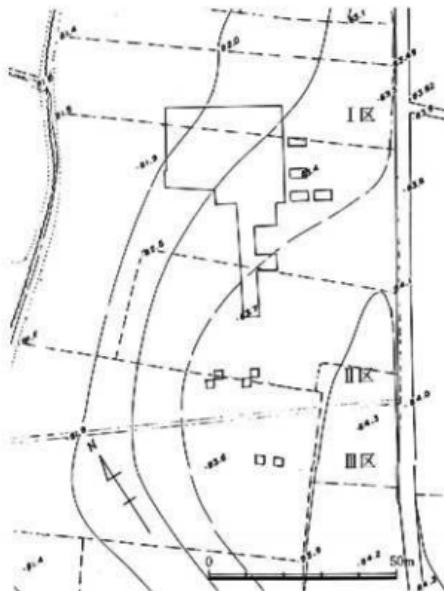
##### 遺 物

遺物は、尖頭器、スクレイパー、ナイフ形石器があり剥片の出土も多くみられた。I区においてのみ出土した。出土した層位は、AT層より上層の、AT層の直上の第VI層・褐色土層及び第V層・黒褐色土層（黄橙色軽石混じる）からである。石材としては、暗青色を示す頁岩がその99%程度を占め、黒曜石は7点、ホルフェンスは3点を数えるのみである。I区の中央部において、暗青色の頁岩の剥片が集中する箇所がみられた。

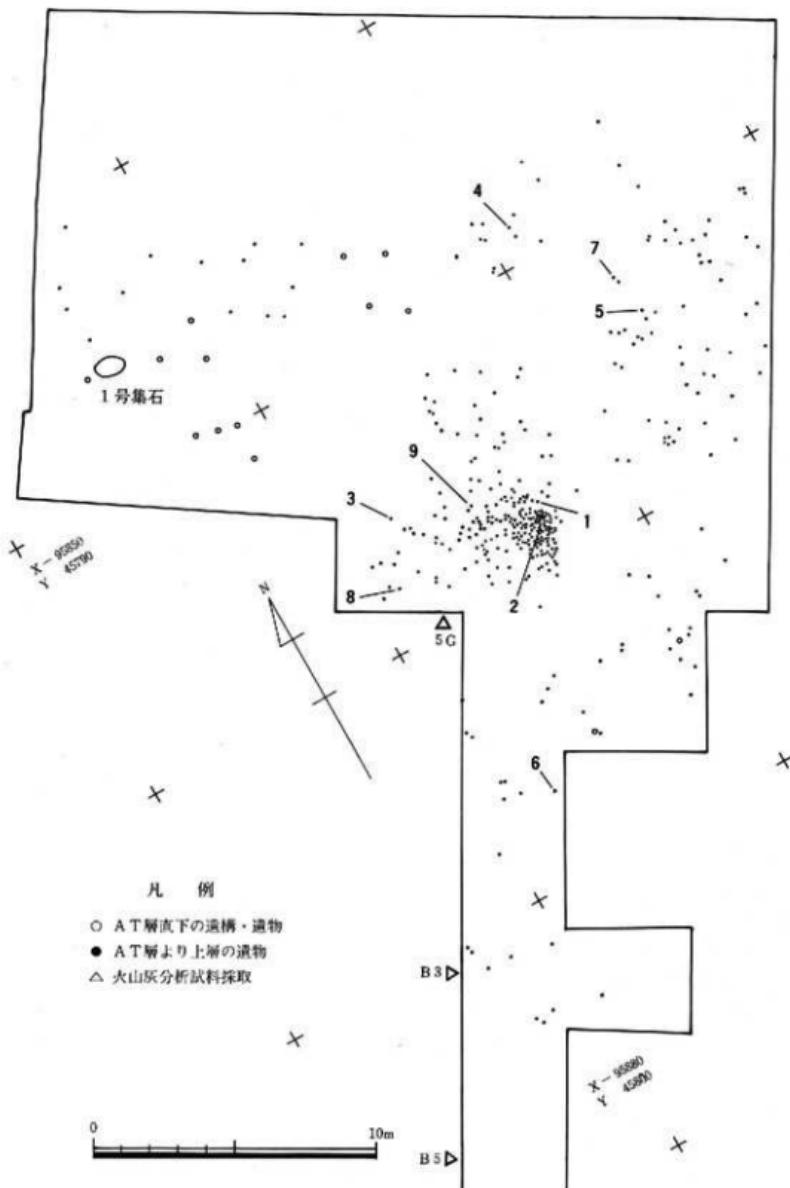
1は三陵尖頭器で、長さ5.2cmである。2は、剥片であるが、尖頭器の機能がうかがわれる。3、5、6はスクレイパーである。いづれも片側からのみ打ち欠いて刃部を成している。4、7はナイフ形石器である。これら、1から7までの石器は、いづれも、暗青色の頁岩を素材としている。



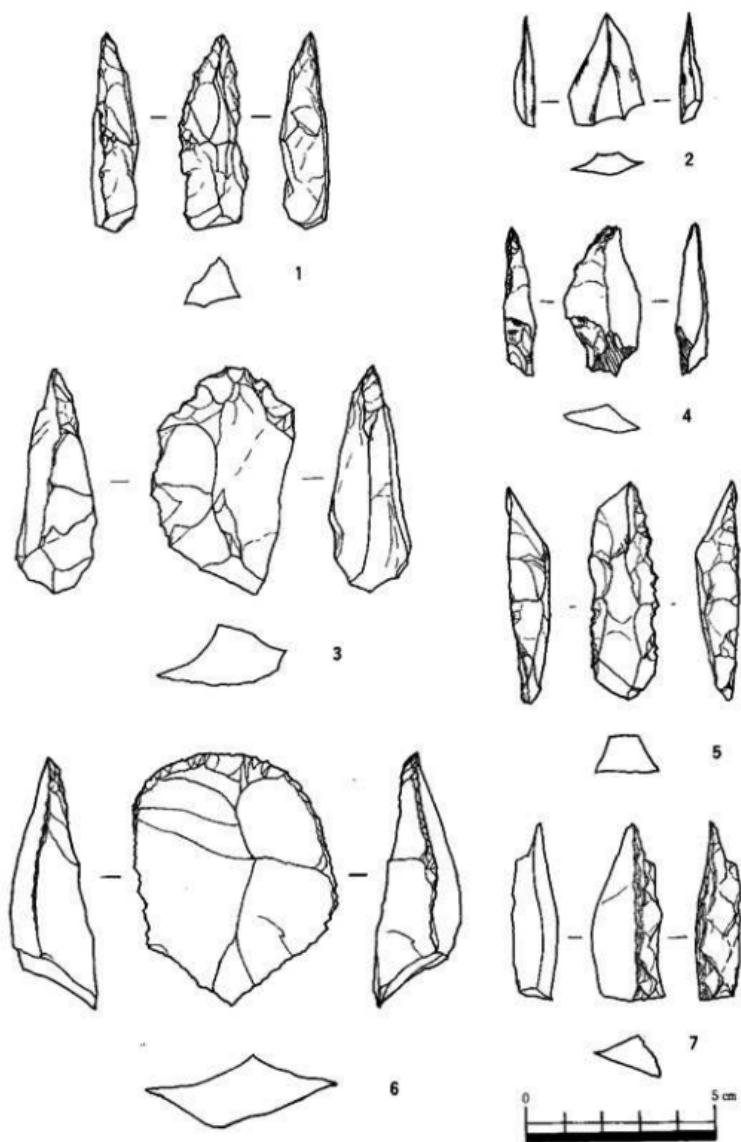
図版1 1号集石（西から）



第3図 北牛牧第1遺跡調査区位置図 (1/1,500)



第4図 北牛牧第1遺跡調査区I区平面図 (1/200)



第5図 旧石器時代石器実測図 (2/3)

## 2. 牛牧原遺跡における遺構

旧石器時代の遺構として、集石遺構5基を検出した。いづれも、同じ調査区からであり、先述の北牛牧第1遺跡の西側を北から南へ走る谷の、下流約350m付近の内岸の微高地に位置する。

### 2号集石

A.T層の上層の褐色土層にて検出した。直径10cm大から3cm大の、尾鉛酸性岩、砂岩、頁岩などを、直径70cm位の円形に密にまとまりをもつ。掘りこみはみられない。

### 3号集石

A.T層の直上にて検出した。直径13cm大くらいから3cm大の、尾鉛酸性岩、砂岩、頁岩などを用いる。礫は全体としてまとまらず、平面に散らばり、掘りこみはみられない。

### 4号集石

A.T層の直上にて検出した。礫は3つのまとまりから成り、西側のものは、直径15cmから10cm大の丸味のある尾鉛酸性岩が多くみられる。中央のものは、割れて角ばった、5cm大の砂岩が主である。東側のものは、西側のものと同じく、丸味のある礫を用いるが、まとまりは弱い。全体に平面に分布し、重なりはみられない。

### 5号集石

A.T層の上層の褐色土層にて検出した。直径10cm大の丸味のある礫を多用している。これらには、尾鉛酸性岩が多くみられる。割れた礫には、砂岩、頁岩が多くみられる。集石としては、平面に広がりをみせ、重なりは少ない。

### 6号集石

A.T層の上層の褐色土層にて検出した。西側のまとまりのある一群と、東側の散らばりのあるものとから成る。いづれも、平面に広がりをみせ、重なりはごく少ない。

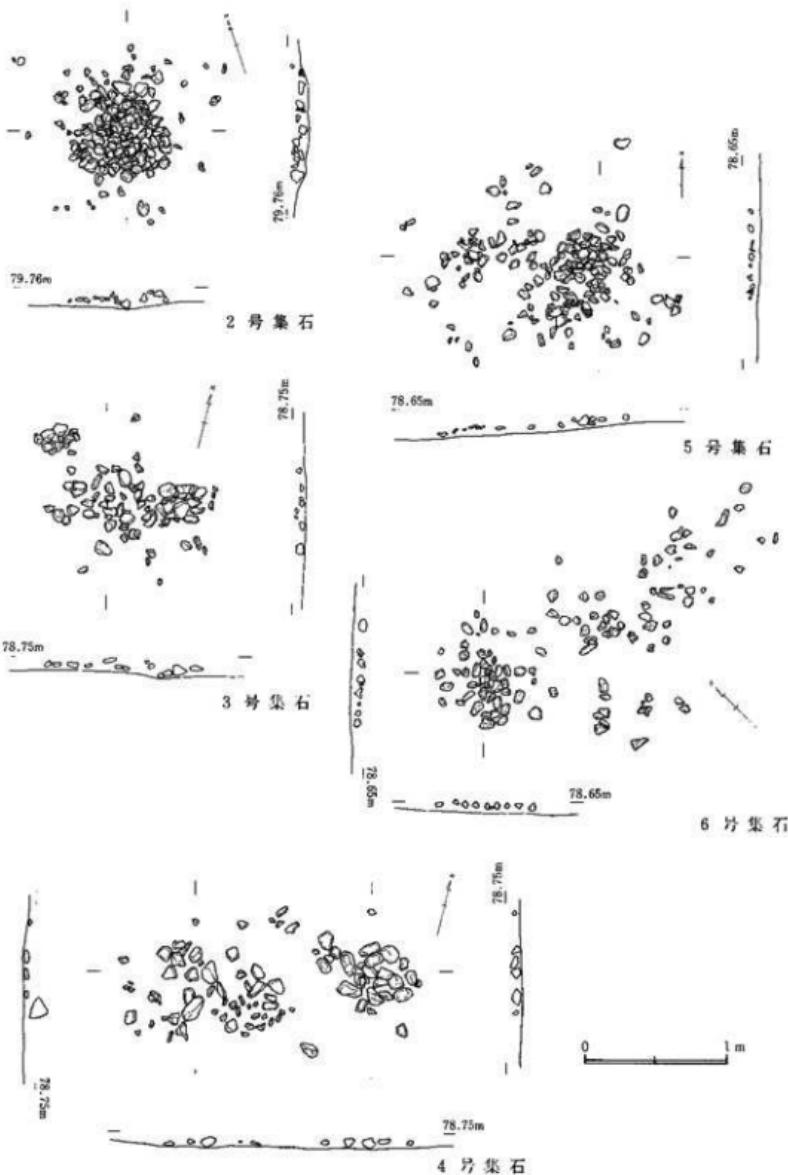
これらの集石遺構は、北東から南西へと、谷に沿う、狭い範囲での分布がみられた。

X-- 96016.158

Y-- 45531.532



第6図 牛牧原遺跡遺構分布図1 (1/600)



第7図 牛牧原遺跡集石遺構実測図 (1/40)

## IV 繩文時代

### 1. 遺構

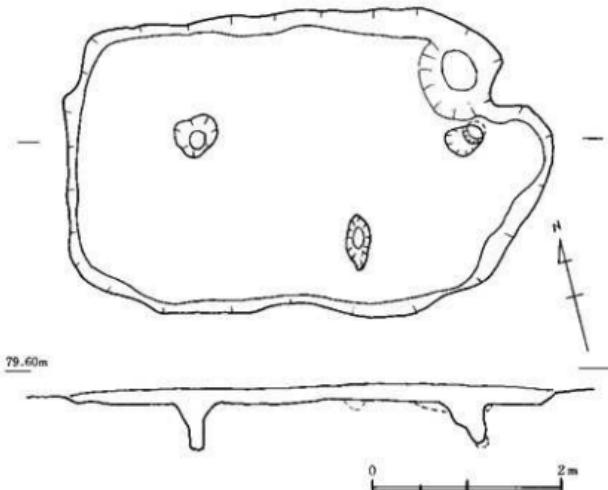
縄文時代の遺構としては、牛牧原遺跡において検出した。1号住居跡がある。この住居跡を検出した箇所は、土層の遺存が不良であり、表上での黒色土（耕作土）層の直下において、本米みられる、アカホヤ火山灰層、その下層の黒褐色土層は既に削平されており、その下層の暗褐色土層がみられた。住居跡は、この暗褐色土層からの検出であり、遺構の上面部も削平を受けており、遺存状況は良好でない。

1号住居跡は、東側の辺にふくらみをもつ長方形プランを呈する。長軸にそう方向で、主柱2本を立てる。この住居跡は、検出した層位やその形状から縄文時代のものと考えられる。遺物は、床面より、若干の土器小片を得たのみである。

### 2. 遺物

遺物としては、北牛牧第1遺跡I区で出土した石錐がある。（第4図、第15図）

8は打製石錐で、脚部を作り出す。石材はチャートである。9は打製石錐で、基部の中心を抉る。石材はチャートである。8、9いずれも、アカホヤ火山灰層の直下の黒褐色土層下位より出土した。



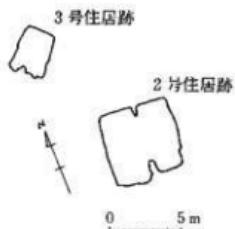
第8図 1号住居跡実測図 (1/60)

## V 弥生時代

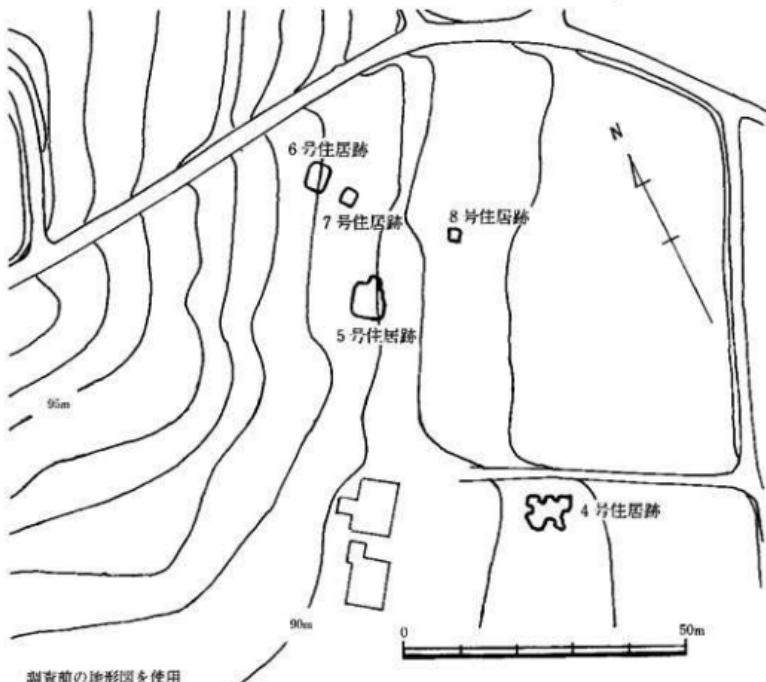
### 1. 遺構の分布状況

弥生時代の遺構は、牛牧原遺跡にて、住居跡7軒を検出した。住居跡は2群に分かれ、1つは遺跡東部を走る谷と、南辺を西から東へ走る谷の交差する付近において、2号、3号の2軒を検出した。この地点は、調査の対象とした区域の南端にあたり、先述の旧石器時代の集石群や、縄文時代と考えられる1号住居跡を検出した箇所から南西へ約200mを隔てており、北半牧第1遺跡調査区西側から続く谷筋と、調査対象区域南辺に走る谷筋の交流点付近に位置する。

もう1つは、牛牧原遺跡西端にあたる箇所で、調査対象区の西側にある丘陵の東斜面に、4号から8号までの5軒の住居跡を検出した。この地点は、2・3号住居跡の検出地点から、北西へ約600mを隔てており、北半牧第1遺跡調査区からは、谷地形をはさんで、西へ約800m隔てた付近である。



第9図 牛牧原遺跡遺構分布図2 (1/400)



第10図 牛牧原遺跡遺構分布図3 (1/1,000)

## 2. 遺構と遺物

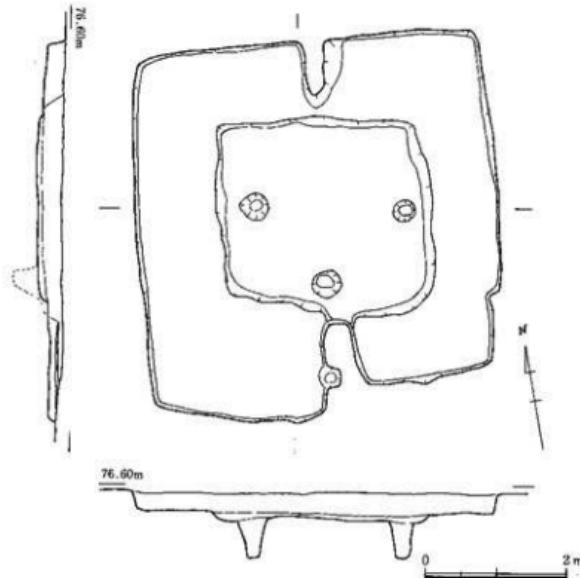
### 2号住居跡

2号住居跡は、3号住居と隣接し、表土の黒色土層の下のアカホヤ火山灰層の面にて検出した。住居跡は、 $5.2m \times 5m$ の方形のプランを基に、南壁と北壁のほぼ中央より住居内へ約90cmの間仕切りが延びる。この間仕切りの長さとほぼ同じ幅で、壁面から一段高まりを残し、中央部分は、 $2.2m \times 2.5m$ で外壁と方向をそろえて掘り込み、床面を成す。この床面上に2本の主柱を設ける。主柱の並ぶ方向は、間仕切りの出る方向と交差する。外壁のプランは、間仕切りを設けるラインでは対象であるが、南壁の間仕切りの西部分は、東部分のそれよりも約20cmほど張り出す。床面より、一段高く設けた壁ぎわの部分は、ベッドの機能をもつ部分と考えられる。

### 遺物

2号住居跡から出土した遺物は、土器片、石器など約100点を得た。

1は、甕の口縁部で、ヨコ方向に粗くハケ日がみられ、口縁部からやや垂れ下がるように刻目突帯を有する。色調は褐色であるが外面はやや黒みを帯びる。石器では、10は、磨製石鎌で、基部を平らにしている。石材は灰緑色の頁岩である。この石材の剥片も出土している。11は、磨製石鎌で、基部を平らにする。石材は暗青色の頁岩である。12は、石鎌で刃部を打ち欠いて成形し、両面は磨きを施す。磨製石鎌の製作途中と考えられる。石材は、暗青色の頁岩である。



第11図 2号住居跡実測図 (1/80)

### 3号住居跡

3号住居跡は、アカホヤ火山灰層の面にて検出した。住居跡は、 $2.4m \times 3.2m$ の方形プランを基にするが、南西に面する壁面は不整形で、西隅は張り出しをもち床面よりも一段掘り込む。長辺の方向での2本の主柱をもつ。2号住居跡と比較すると小型で、居住以外の貯蔵などのためのものと考えられよう。

### 遺物

3号住居跡からは、土器を主とし、石器など約40点が出土した。2は、壺形土器で、口縁部が大きく外に開く形状をもつものである。口縁部の内側には、ヘラ先によると考えられる列点文を2段に施している。色調は、暗褐色を呈する。3は、甕の口縁部であり、斜めにハケ目を施す。口縁部下に刻目突帯をもつ。色調は、赤褐色であるが、口縁近くは暗褐色を帯びる。4は、甕の口縁部で、タテにハケ目を施す。口縁部下に刻目突帯をもち、3との共通性がうかがわれる。色調は、胴部が暗褐色、口縁部は褐色を呈する。5は、壺又は甕で、ナデ調整がみられる。色調は明褐色を呈する。

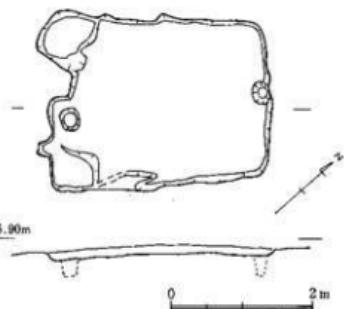
### 4号住居跡

4号住居跡は、表土の黒色土直下にて検出した。この地点では、アカホヤ火山灰層は削平を受けておりみられず、その直下の黒褐色土層の面において、床面が遺存していた。住居跡は、南東部分にて不整形な形状を示すが、壁面の確認できる北壁部において、2箇所に間仕切りが突出し、西壁においては、1箇所で幅広の間仕切り（あるいは2箇所での突出部）を有している。東南部の不整形の箇所が、削平によるものか、従来の形状かは不明である。このプランは、南九州にみられる。花弁型の住居跡のプランとの類似性がうかがわれる。形状としては、方形のプランに間仕切りをもつ住居跡と考えられる。この住居跡は、2本の主柱をもち、住居内の中央より南寄りに、 $1.8m \times 1.9m$ のだ円形に近い方形の、深さ約10cm程度の掘り込みをもつ。

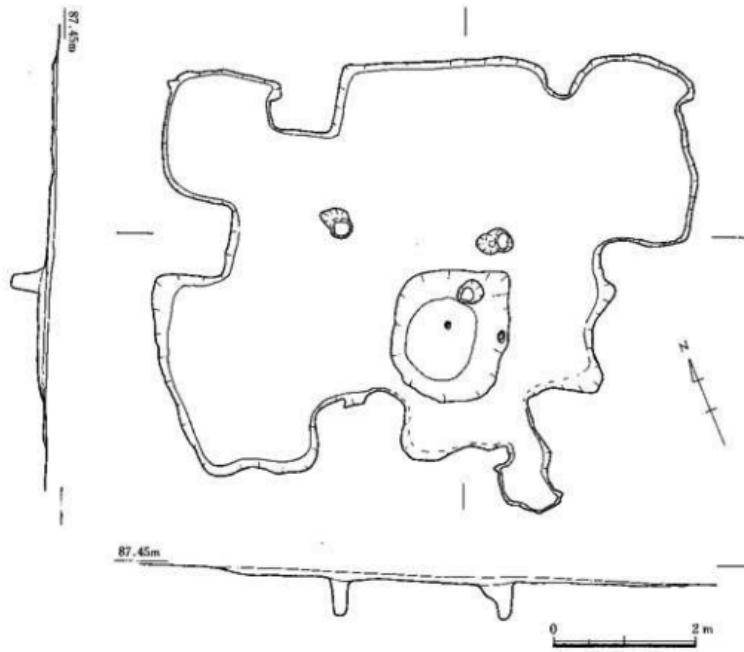
### 遺物

4号住居跡での遺物として、住居内の浅い掘り込みの部分を中心として、灰緑色の頁岩の剥片や、灰赤色の頁岩の剥方が多数出土したことが特記される。ここでは、石器を主として約270点余の出土があった。13は、磨製石鎌の先端部である。石材は灰赤色の頁岩を用いる。14は、磨製石鎌で、鎌の先端部と脚部の先端を欠いている。形状は、脚部を作り出し、長身である。石材は灰赤色の頁岩である。15は、石包丁の先端と考えられる。刃部は、片刃のみを成形している。石材は灰赤色の頁岩である。17、18、19、20は、磨製石鎌であり、基部を円ませている形状を示す。18は、やや刃部にふくらみをもつ。19は、やや細形である。石材は、いづれも、灰緑色の頁岩を用いている。

これらのことから、この住居跡においては、石核の出土はみられなかったが、磨製石鎌の製作をおこ



第12図 3号住居跡実測図 (1/80)



第13図 4号住居跡実測図 (1/80)

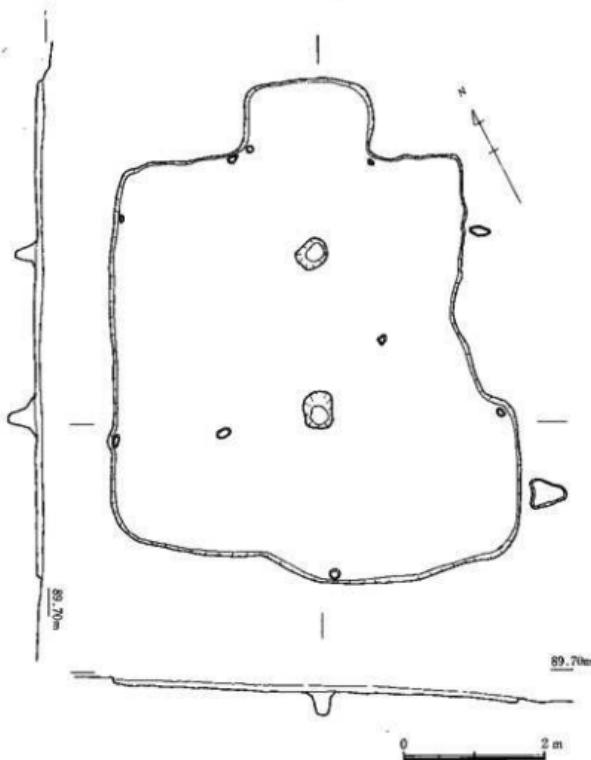
なっていたことがうかがわれる。住居内に設けた掘り込みの付近が作業の場所である可能性が強い。

#### 5号住居跡

5号住居跡は、4号住居跡から約50mを隔てた斜面にて検出した。この地点においても削平がおこなわれ、アカホヤ火山灰層の残存はごく弱く、アカホヤ火山灰層の直下、黒褐色土層にて検出した。住居跡は、方形を基調とし北壁中央部を突出させ、南東隅部分を突出させたプランであるといえる。主柱は、住居の長辺に沿う方向で2本を設ける。この住居跡は、壁面はほとんど削平を受けていた。

#### 遺物

遺物としては、床面より、20点余の土器小片を得た。



第14図 5号住居跡実測図 (1/80)

#### 6号住居跡

6号住居跡は、表上の直下で検出した。この地点でも、斜面であることと耕作により削平をうけ、アカホヤ火山灰層はみられず、その直下の黒褐色土層も大半は削平を受けていた。住居跡は、この暗褐色土層の下位にて検出した。住居跡は、 $3.6m \times 4.4m$ の方形プランであり、長辺に沿う方向で、2本の主柱をもつ。

#### 遺物

6は、壺又は甕の口縁部で、ヨコナデを施し、口縁下部に刻目突帯をもつ。色調は明褐色を呈する。7は、壺又は甕の口縁部で、口縁下部に刻目突帯をもつ。色調は淡褐色を呈する。8は、甕の口縁である。口縁先端より下部は厚みをもち、ハケ目を施す。色調は明褐色を呈する。10は、壺又は甕の底部で

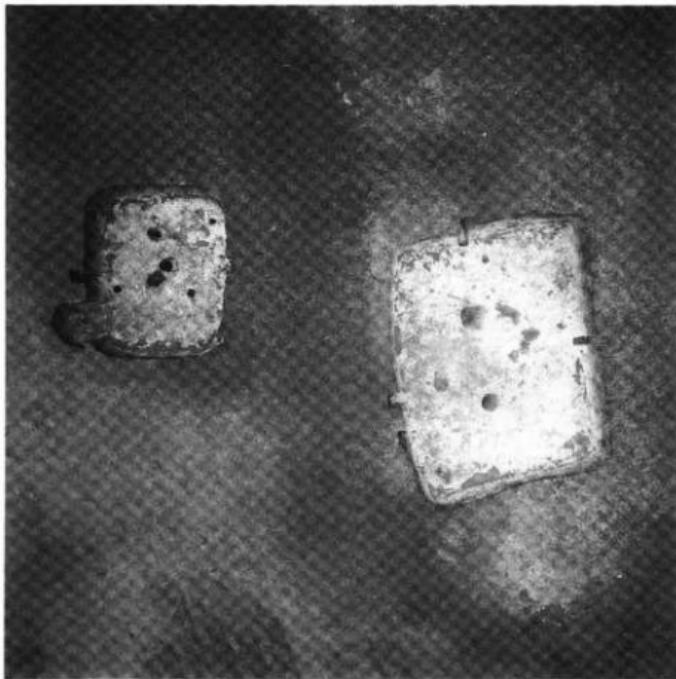
あり、厚みをもちしっかりとしたつくりである。色調は、外側は明褐色で、内側は黒褐色を呈する。

#### 7号住居跡

7号住居跡は、6号住居跡の斜面下方に隣接する。住居跡は、表土直下にて、アカホヤ火山灰層の削平により、その直下の、黒褐色土層にて検出した。2.5m×3mの方形プランを基調に、東壁の北部を約80cmほど張り出す。主柱穴とみられるものは、中央部と南部にみられるが、規則性がみられず、構造は不明である。6号住居跡と比較して小規模であり、住居としての機能は不足があると考えられる。

#### 遺物

9は、壺の口縁部である。口縁部と口縁下部の2段に刻目突帯をもつ。色調は、明褐色を呈する。11は、壺又は壺の口縁部である。口縁下部に刻目突帯をもつ。色調は褐色を呈する。16は、磨製石鑿であり、基部の中心を強く抉る。石材は、濃青色の頁岩を用いる。



図版2 6号住居跡 7号住居跡

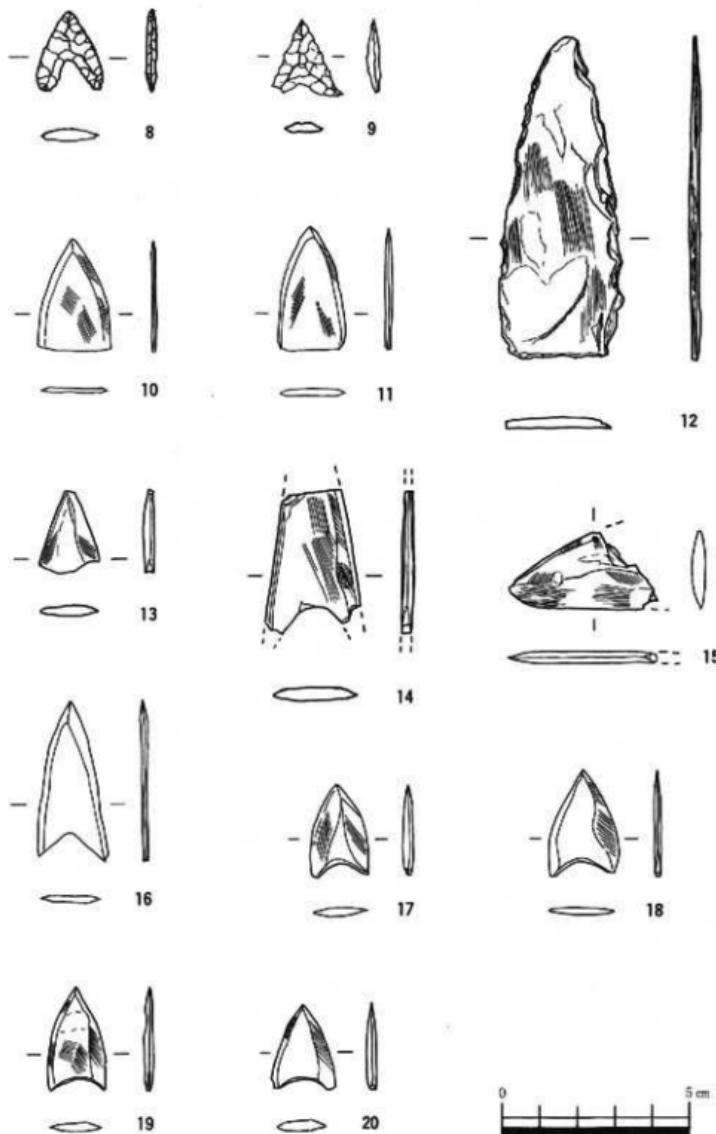
(左：7号住居跡 右：6号住居跡)

### 8号住居跡

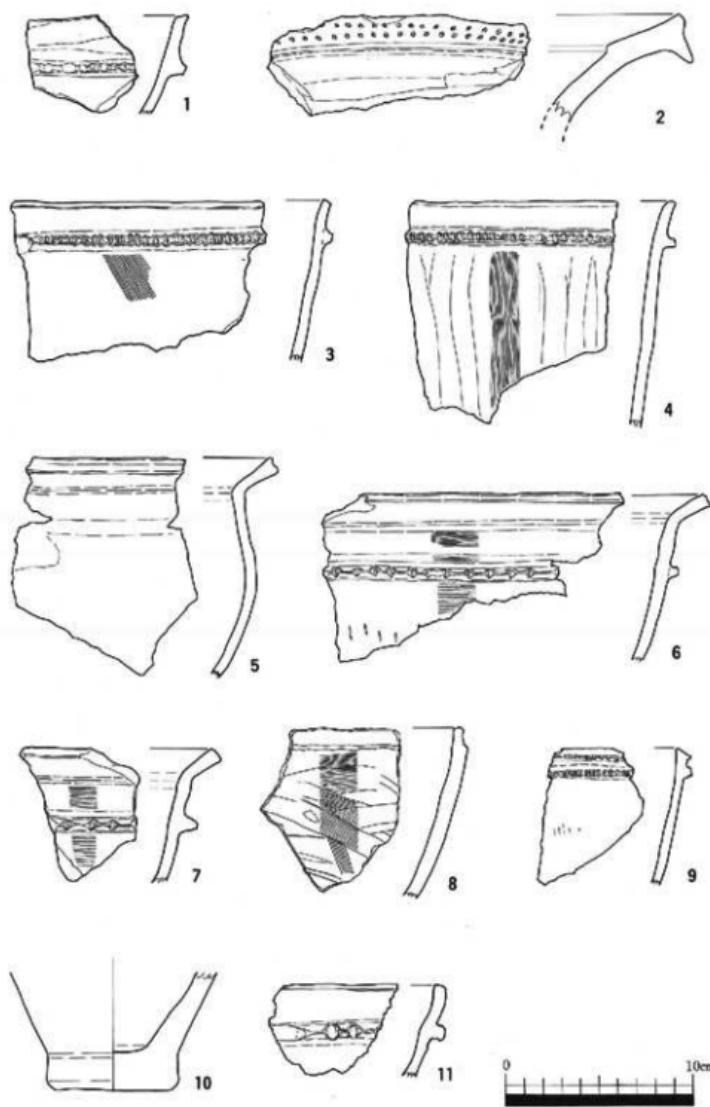
8号住居跡は、6号、7号住居跡から斜面下方に位置する、表土下、アカホヤ火山灰層において検出した。住居跡は、 $2.6m \times 1.9m$ の方形プランで、床面にピットがみられるが、規則性のある配置はみられず、柱穴と判定するにはいたらない。また、このプランの周囲にピットが分布するが、住居跡の西側部分に集中し、東側部分はみられない。これらのピットは、住居跡の屋根に関連する可能性が考えられるが、その性格は不明である。この8号住居跡は、7号住居跡と同様に規模が小さいもので、居住性は乏しいと考えられ、それ以外の、貯蔵などの機能をもつものと考えられる。



図版3 8号住居跡（西から）



第15図 縄文時代、弥生時代石器実測図 (2/3)



第16図 弥生時代土器実測図 (1/3)

## VI まとめ

今回の調査では、中尾・牛牧地区という台地上面の広大な区域を対象とし、旧石器時代から弥生時代にかけての遺構・遺物を検出し、当地での生活の営みをうかがうことができた。

旧石器時代については、近年の県内での遺跡発見が続くな中にあって、北牛牧第1遺跡においての、AT火山灰層（約2.2～2.5万年前）の直下での集石遺構は、町内の初見であり、旧石器時代の貴重な資料を得た。

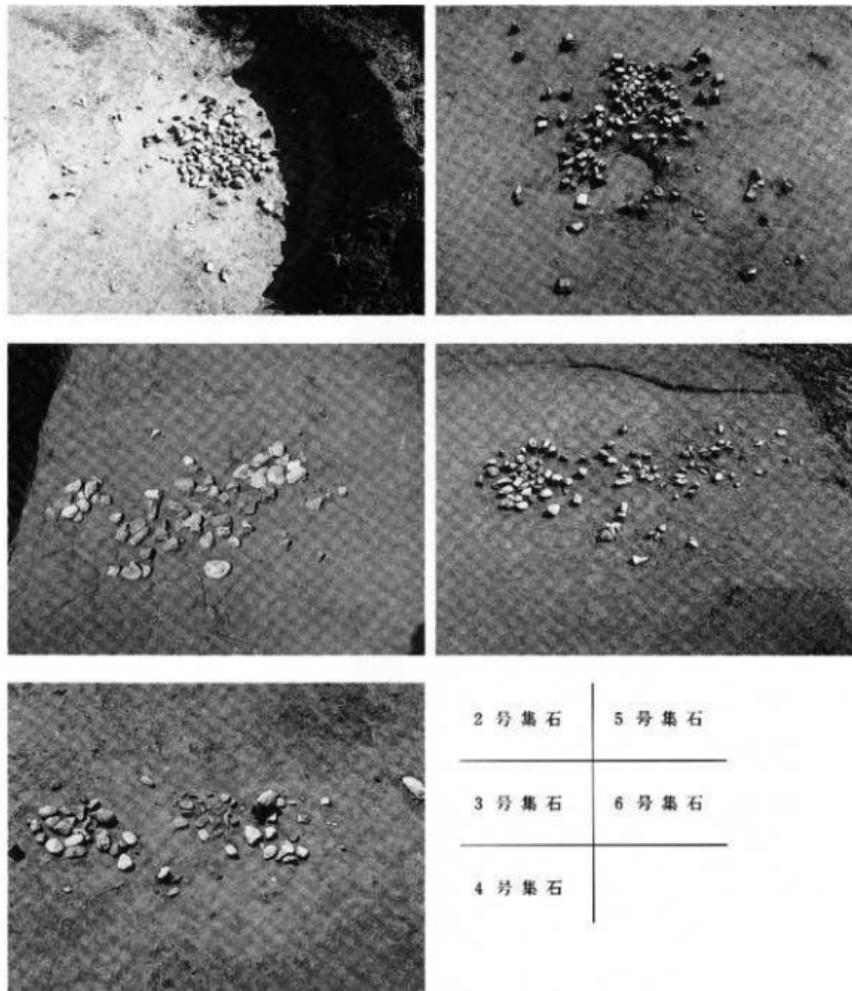
縄文時代については、検出した遺構はわずかであった。このことが示す意味について、考察すべき課題を得た。

弥生時代については、多くの遺構・遺物を検出した。特に、住居跡の検出により、当地域での資料が増え、この時代の解明への手かがりとなる。

住居跡では、検出した遺構が、弥生時代中期から後期にあてはまるものと考えられ、そのプランにも方形や間仕切りをもつものなど種類をみることができる。また、大小の住居跡が隣接しているものがあり、それぞれの存在の時期差が小さいと考えられるので、2軒が対をなして機能した可能性がある。さらに、台地上面にある丘陵の斜面に、住居跡がまとまってみられるところから、斜面地での住居跡についての資料を得た。当調査地においては、住居の切り合いの関係がみられなかったことも、特色の1つである。

遺物については、各々の住居跡から多くの出土があった。そのなかで、刻目突骨をもつ甕は、ほぼ共通してみられる。これらは、「下城式」にあてはまるもので、町内の持田巾尾遺跡や大戸の口第2遺跡からも同種の出土があり、これらの遺跡との時期、性格を共有することを示すものである。

今回の調査は、その位置が、台地内部にあり、そのことが、遺跡の立地がよくみられる、台地縁辺部との差異がみられるかどうか、という点で、資料を得る機会となった。現在のところ、台地内部は、縁辺部に比べて、遺跡の立地は密でない、という事例が多くみられている。当地においても、それと同様の調査結果であった。今後、このことが示す意味について、資料の集積と、考察を進める必要がある。



図版4 牛牧原遺跡旧石器時代集石遺構



調査区 遺 墓（東から）

（北部は調査後、  
一部着工）

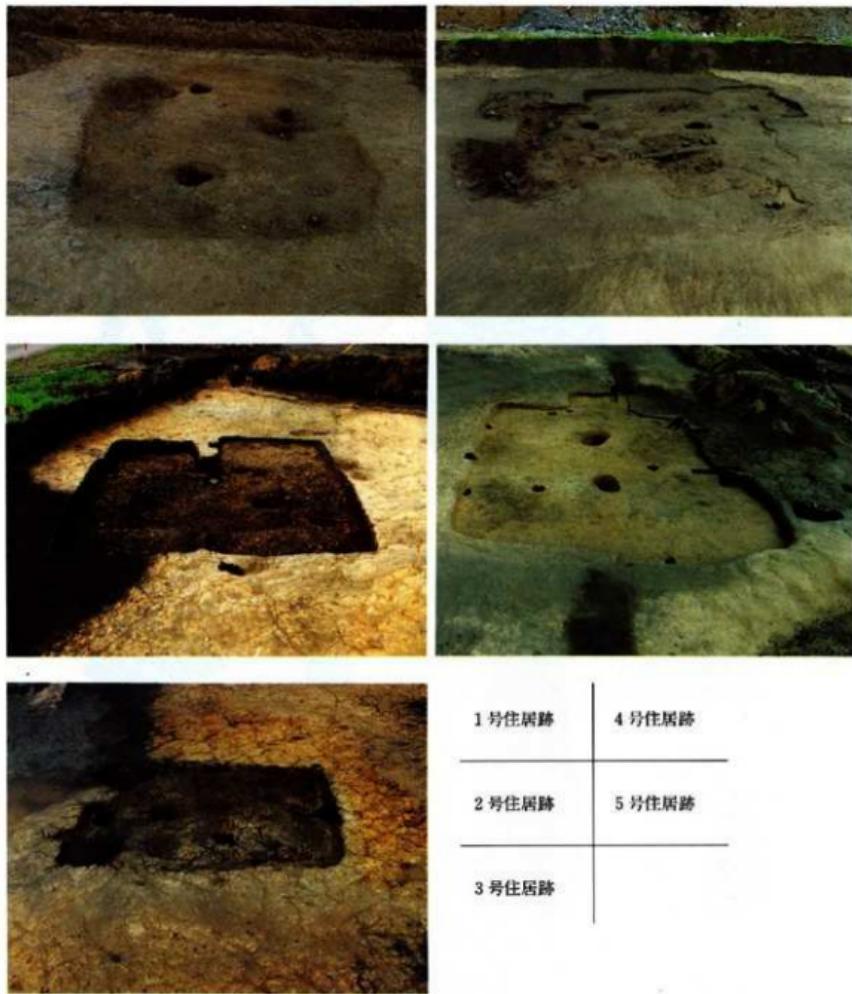


調査区 I 区



1号集石検出状況

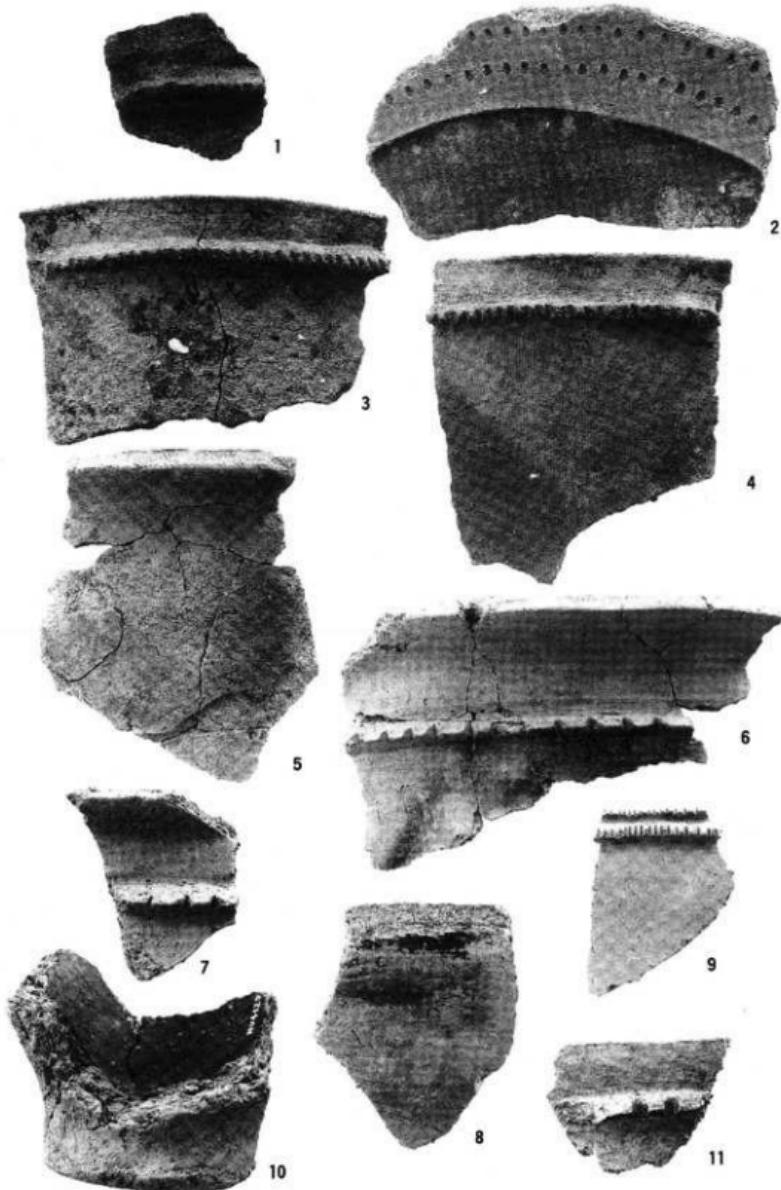
図版 5 北牛牧第1遺跡調査状況



図版6 牛牧原遺跡縄文時代・弥生時代住居跡



圖版 7 旧石器、縄文、弥生時代石器 (2/3)



図版 8 弥生時代土器 (1/2)



# 自然科学分析調査報告書

—高鍋町、北牛牧第1遺跡—

株式会社 古 環 境 研 究 所

# 高鍋町、北牛牧第1遺跡の火山灰分析報告

株式会社 古環境研究所

## 1. はじめに

高鍋町域には、霧島火山のほか姶良カルデラや鬼界カルデラなどから噴出したテフラ（火山碎屑物、いわゆる火山灰）が多く分布している。これらのテフラの多くについては、すでに噴出年代が明らかにされており、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代に関する資料を収集できるようになっている。北牛牧第1遺跡の発掘調査では、いわゆるローム層とその上位の黒土から石器が検出された。そこで北牛牧第1遺跡において地質調査と屈折率測定を行い、示標テフラの層位を明らかにして、遺物包含層の堆積年代に関する資料を求めるうことになった。調査の対象となった地点は、B-3グリッド、B-5グリッド、5グリッド、調査区西側の4地点である。

## 2. 土層の層序

### (1) B-3グリッド

ここでは、下位より褐色土（層厚10cm以上）、灰色粗粒火山灰混じりで暗褐色土（層厚31cm）、成層したテフラ層（層厚13cm）、黄色軽石および灰色粗粒火山灰混じり黄灰色砂質土（層厚29cm、軽石の最大径7mm）、暗褐色土（層厚25cm）、黄褐色細粒石混じり黒褐色土（層厚9cm、軽石の最大径11mm）、灰色土がかかった暗褐色土（層厚20cm）、灰色粗粒火山灰混じり黒褐色土（層厚14cm）の連続が認められた（図1）。これらの土層のうち、成層したテフラ層は下部の黄色細粒火山灰層（層厚3cm）と上部の黄色粗粒火山灰層（層厚10cm）から構成されている。このテフラ層は、その層相から約2.2-2.5万年前に姶良カルデラから噴出した姶良Tn火山灰（AT、町田・新井、1976, 1992）に同定される。発掘調査では、これらの土層のうちATの下位から剥片が、またその上位の暗褐色土から礫群が検出されている。

なお本遺跡の遺構の確認面は、層厚14cmほどの橙色細粒火山灰層の基底に設定されている。この火山灰層の基底部約1cmには、細粒の降下軽石層（軽石の最大径3mm）が認められる。このテフラ層は、その層相から約6,300年前に鬼界カルデラから噴出した鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah、町田・新井、1978）に同定される。

### (2) B-5グリッド

ここでは、下位より黄色粗粒火山灰層（層厚9cm以上）、黄色軽石および灰色粗粒火山灰混じり黄灰色砂質土（層厚19cm、軽石の最大径7mm）、暗褐色土（層厚22cm）、黄褐色細粒石混じり黒褐色土（層厚10cm、軽石の最大径11mm）、暗褐色土（層厚25cm）、灰色粗粒火山灰混じり黒褐色土（層厚15cm）の連続が認められた（図2）。これらの土層のうち、最下部の黄色粗粒火山灰層は、その層相からATに同定される。発掘調査では、最上位の黒褐色土の基底部から縄文時代早期と推定されている。

集石遺構が検出されている。

### (3) 5 グリッド

本地点は、下位より灰色粗粒火山灰混じり暗褐色土（層厚20cm以上）、黃色粗粒火山灰層（層厚9cm）、黃色輕石および灰色粗粒火山灰混じり黃灰色砂質土（層厚23cm、輕石の最大径6mm）、暗褐色土（層厚22cm）、黃橙色輕石混じり黒褐色土（層厚14cm、輕石の最大径10mm）、暗褐色土（層厚2.8cm）、灰色粗粒火山灰混じり黒褐色土（層厚16cm）が認められた（図3）。これらの土層のうち、黃色粗粒火山灰層は、その層相からATに同定される。発掘調査では、黃橙色輕石混じり黒褐色土の下位の暗褐色土の基底付近から焼けた礫群が検出された。

### (4) 調査区西側

ここでは、下位より褐色粘質土（層厚26cm以上）、褐色輕石混じり黃色輕石層（層厚13mm、石質岩片の最大径6mm）、褐色土（層厚28cm）、灰色粗粒火山灰混じり暗褐色土（層厚29cm）が認められる（図4）。これらのうち、褐色輕石混じり黃色輕石層は、その層相から霧島－イワオコシ輕石層（Kr-Iw）に同定される。

## 3. 屈折率測定

### (1) 測定試料と測定方法

北牛牧第1遺跡B-3グリッドにおいて検出されたテフラのうち、ATに同定される試料番号3、4を除く3試料について、位相差法（新井、1972）によりテフラ粒子の屈折率の測定を行うことになった。

### (2) 測定結果

北牛牧第1遺跡B-3グリッドにおける屈折率測定結果を、表1に示す。試料番号5には、斜方輝石、單斜輝石、磁鐵鉱のほかに、角閃石やカンラン石が少量含まれている。これらのうち斜方輝石の屈折率（ $\gamma$ ）は、1.706-1.710である。なおこの試料には、 $\beta$ 石英が特徴的に多く含まれている。

一方、ATの上位にある試料番号2には、透明のパブル型ガラスが多く認められた。このガラスの屈折率（n）は1.499-1.501である。この試料中には、斜方輝石、單斜輝石、磁鐵鉱などの重鉱物が含まれている。斜方輝石の屈折率（ $\gamma$ ）は、1.705-1.708である。さらにその上位の試料番号1には、斜方輝石、單斜輝石、磁鐵鉱などの重鉱物が含まれている。これらのうち、斜方輝石の屈折率（ $\gamma$ ）は1.705-1.709である。

## 4. 審査一とくに示標テフラとの同定と遺物の層位について

$\beta$ 石英が特徴的に含まれている試料番号5のテフラ粒子は、霧島火山起源よりもむしろ姶良カルデラ起源のテフラに由来している可能性が大きいと思われる。Kr-Iwより上位でATの下位にあり、本遺跡付近に降灰した可能性が大きいテフラとしては、姶良人塚テフラ（A-Ot、長岡、1984、町田・新井、

1992) と、その上位の始良深港テフラ (A-Fm, 長岡, 1984, 町田・新井, 1992) がある。とくに後者の噴火の規模が大きいことから、A-Fm由来の粒子が試料番号5に多く含まれているものと思われる。ただし、試料番号5に含まれる斜方輝石の屈折率と、A-OtやA-Fmのそれ (A-Ot: 1.719-1.730, A-Fm: 1.720-1.729) とは一致しない。むしろ試料番号5に含まれる斜方輝石の屈折率 ( $\gamma$ ) は、Kr-Iwのそれ ( $\gamma$ : 1.705-1.708) の方に一致する。この試料番号5に含まれるテフラの起源については、今後遺跡周辺での調査分析を続ける必要がある。

試料番号2に含まれる火山ガラスは、その色調や形態さらに屈折率などから、AT起源のガラスであることがわかる。ただしこのテフラ粒子の層位や岩相さらに斜方輝石の屈折率は、約1.6万年前より新しいと推定されている霧島小林テフラ (Kr-Kb, 町田・新井, 1992, 少なくとも約1.1万年前以前) の特徴と一致する。したがって、試料番号2に含まれる火山ガラス以外のテフラ粒子の多くは、Kr-Kbに由来していると考えられる。また試料番号1に含まれるこのテフラ粒子は、斜方輝石の屈折率などから縄文時代に桜島火山から噴出したテフラに由来しているものと考えられる。

これらの示標テフラとの関係から、北牛牧第1遺跡において検出された石器のうち、最下位のものは少なくともA-Otの上位でATの下位、また砾群を伴う石器はATの上位でKr-Kbの下位にあると考えられる。さらに発掘調査により縄文時代早期と推定されている集石遺構は、Kr-Kbの上位にあり、少なくともK-Ahよりも下位にある。この遺構の年代については、今後縄文時代に桜島火山から噴出し本遺跡で検出されたテフラの噴出年代が重要となる。

## 5. まとめ

北牛牧第1遺跡において地質調査および屈折率測定を合わせて行った結果、下位より霧島イワオコシリ石 (Kr-Iw)、始良大塚テフラ (A-Ot) または始良深港テフラ (A-Fm)、始良Tn火山灰 (AT, 約2.2-2.5万年前)、霧島一小林怪石 (Kr-K, 約1.6-1.1万年前)、桜島火山起源の縄文時代のテフラ、鬼界アカホヤ火山灰 (K-Ah) などの示標テフラの層位が認められた。これらとの層位関係から、本遺跡において検出された石器のうち、最下位のものは少なくともA-Otの上位でATの下位、また砾群を伴う石器はATの上位でKr-Kbの下位にあると推定された。さらに発掘調査により縄文時代早期と推定されている集石遺構は、Kr-Kbの上位にあり、少なくともK-Ahよりも下位にあることが明らかになった。

以上のように多くの示標テフラと文化層の存在する本遺跡とその周辺地域は、宮崎県中部における旧石器時代～縄文時代の編年上、非常に重要な地域と言えよう。今後も地質調査とテフラ分析を行い、資料を蓄積していく必要がある。

## 文 献

- 新井房夫 (1972) 斜方輝石・角閃石によるテフラの同定—テフロクロノロジーの基礎的研究. 第四紀研究, 11, p.254-269.  
町田 洋・新井房夫 (1976) 広域に分布する火山灰—始良Tn火山灰の発見とその意義—. 科学, 46, p.339-347.  
町田 洋・新井房夫 (1978) 南九州鬼界カルテラから噴出した広城テフラ—鬼界アカホヤ火山灰. 第四紀研究, 17, p.243-263.  
長岡健治 (1984) 大隅半島北部から宮崎平野に分布する後期更新世テフラ. 地学誌, 93, p.347-370.

表1 北牛牧第1遭跡B-3 グリッドにおける屈折率測定結果

試料	主 組 物	火山ガラス (n)	斜方輝石 (y)
1	opx>cpx, mt	—	1.705-1.709
2	opx>cpx, mt	1.499-1.501	1.705-1.708
5	opx>cpx, mt, (ho, ol)	—	1.706-1.710

ol : カンラン石, opx : 斜方輝石, cpx : 単斜輝石, ho : 角閃石,  
mt : 磁鉄鉱. 屈折率の測定は、位相差法(新井, 1972)による.

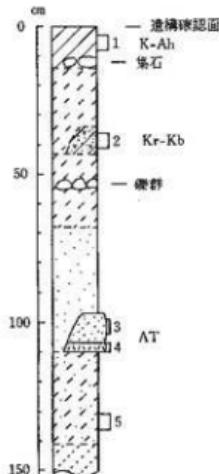


図1 B-3グリッドの土層柱状図  
数字はテフラ分析の試料番号

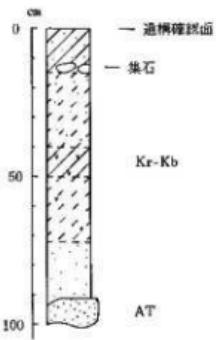


図2 B-5グリッドの土層柱状図

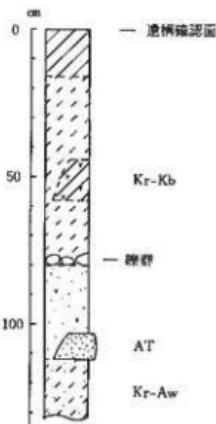


図3 5グリッドの土層柱状図

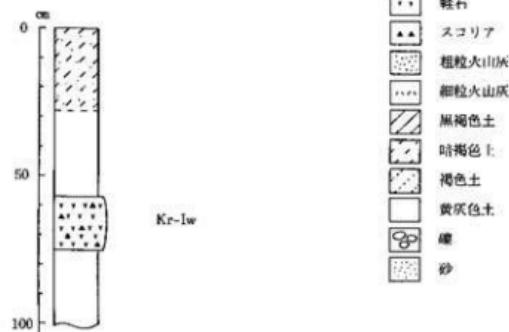


図4 調査区西側の土層柱状図

# 報告書抄録

ふりがな	なか お うしまき ちく いせき							
書名	中尾・牛牧地区遺跡							
副書名	農村基盤総合整備パイロット事業尾鈴2期地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	高鍋町文化財調査報告書							
シリーズ番号	第7集							
編著者名	山木 格							
編集機関	高鍋町教育委員会							
所在地	〒884 宮崎県児湯郡高鍋町大字上江1138番地 TEL 0983(23) 3326							
発行年月日	1995年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °'."	東経 °'."	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
牛牧原遺跡	宮崎県児湯郡 高鍋町大字上江 字牛牧原	45401	2016	32° 07' 58"	131° 29' 07"	19930308 ~ 19930520	3,000	ほ場整備 事業
北牛牧第1遺跡	高鍋町大字上江 字北牛牧		2019	32° 08' 06"	131° 28' 44"	19941004 ~ 19950111	3,500	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
牛牧原遺跡	集落	弥生	竪穴住居 間仕切り住居		弥生土器 磨製石器	弥生時代中期から 後期の間仕切り住居		
北牛牧第1遺跡	その他 の生産 遺跡	旧石器	集石遺構		尖頭器 スクレイパー	AT屋下の集石遺構		

高鍋町文化財調査報告書 第7集

中尾・牛牧地区発掘調査報告書

農村基盤総合整備パイロット事業尾鈴2期地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1995年3月

編集・発行 宮崎県児湯郡高鍋町教育委員会

印 刷 (有)印刷センタークロダ

宮崎市大橋2丁目175番地

〒880 電話24-4351番

